たかさご史話 72

～新検出の中世在銘石造遺品（四）～

前回に続いて新検出・中世在銘石造遺品を紹介します。

〔元センド道地蔵石仏〕

元センド道地蔵石仏

阿弥陀町阿弥陀の共同墓地にある文安四年地蔵石棺仏の場所から東へ約三十メートル、元センド道の脇にあります。

竜山石製で直接地面に埋めてあります。現高七一センチ、幅四七・五センチある石材を使い、五弁の蓮華座上に右手錫杖、左手宝珠を捧げる像高三九・五センチの地蔵立像を彫っています。この石材の上側端部に幅八五センチ、深さ一・五センチある溝があり石棺の側石と思われます。

銘文は五弁の蓮華座の中に刻出しています。

□

十月八日

康永二年二月

歳次乙酉敬白

蓮華座

康永四年（一三四五）は南北朝時代前期の年号です。

また、蓮華座の中に紀年銘を刻出する石造遺品は大変珍しく知見にありません。

〔米田墓地の五輪塔〕

米田墓地五輪塔
水火風の各輪

米田町米田集落の中央に共同墓地があります。墓地の東側に供物台・棺置台そして名号碑が並ぶ、その名号碑の台石に竜山石製で高さ四二センチ、幅五八センチある五輪塔の地輪を転用しています。

地輪の一面に次の銘文を刻出しています。

為□願□

梵字（ア）

康永四年□

八月彼岸中日□敬白

康永四年は南北朝時代前期の年号です。

この地輪と一具と思われる水輪・火輪・風輪（空輪は欠失）が墓地の西側の一角で積み上げてあります。

遺品の各輪に発心門の梵字バ・ラ・カ・（キャ）をヤゲン彫りで刻んでいます。

完全な時の高さは約一六〇センチあったと思われます。

米田墓地五輪塔　地輪

（市史編さん特別執筆者　藤原良夫）